日本医史学雑誌　第57巻第3号（2011）　305–323

ニュージーランドの保健制度改革と日本の「つながり」

――フレデリック・T・キングの1904年日本訪問とその影響――

ジェームズ・ビーティー（James Beattie）[1)]，及川　敬貴[2)]

[1)]ワイカト大学歴史学部，[2)]横浜国立大学大学院環境情報研究院

受付：平成22年10月18日／受理：平成23年2月18日

要旨：本稿は，ニュージーランド保健制度改革の祖として知られる人物とその妻による1904年の日本訪問に関する事例研究を通じて，20世紀初頭における両国の「つながり（connections）」を浮かび上がらせようとするものである．この「つながり」には，ニュージーランドにおける日本の植物への興味や保健制度改革のモデルとしての日本社会への関心が含まれるが，本稿では，それらの興味・関心はもちろん，その他の要素（例：科学的な農業や日本庭園の造園作法）をも併せた，知的なかかわりの総体として，「つながり」を捉えた．かかる観点からの考察を進めることにより，20世紀初頭の知的・科学的な交流の実状をより正確に検討するとともに，近代化にともなう社会制度改革の諸側面を，グローバルな文脈で再検討することが可能になる．

キーワード：ニュージーランド，保健制度改革，フレデリック・T・キング

「西欧諸国が日本人に最も見習うべきことは，作物の育て方ではなく，むしろ人間の育て方である」（フレデリック・T・キング，1905年）[1)]

1. はじめに

フレデリック・T・キング（Frederic Truby King）[2)]（以下，キングという）は，19世紀後半から20世紀初頭のニュージーランドを代表する知識人であり，同国保健制度改革の祖として知られている．キングは，母子健康協会（New Zealand's Plunket Society）の創設者であり，彼が発案・推進した母子保健プログラムの中には，後に全国的な施策として発展したものが少なくない（例：母乳育児）．また，キングは，孤児や精神病患者を対象とする保健プログラムの実務担当者としても活躍し，関連する論考や著書を多数執筆している．それゆえ，ニュージーランドでは，キング本人およびその保健理念・プログラムを題材とする評論・研究等が数多く刊行されているが，その一方で，キングが日本と密接な関わりを有し，その発想の多くに日本の影響が色濃く見られるという事実に関心は払われてこなかった．

本稿は，キングと彼の妻ベラ（Bella King）[3)]による1904年の日本訪問に関する事例研究を通じて，キングの保健理念・プログラムに日本が及ぼした影響を捕捉し，もって20世紀初頭における両国の「つながり（connections）」を明らかにしようとするものである．欧米に影響を及ぼした「日本的なもの」といえば，いわゆるジャポニズムなる概念の下での，限られた日本的な物品（例：浮世絵等の装飾品）が挙げられる場合が通常的であるが，本稿で検証するように，キング夫妻の日本訪問と帰国後におけるその経験の活用は，「日本的なもの」が，物品（例：日本固有の植物種）はもちろん，日本的な文化・発想（例：日本庭園の造園作法）や近代的科学技術の導入と実践（例：農業や育児の理念や手法）をも含んだ，知的なかかわりの総体であったことを示している．

1904年にキングとベラが日本で過ごした4ヶ月間はめまぐるしいものとなった．キング夫妻はこの期間中に，庭園，種苗場，神社，商店およびその他の名所を駆け回った．また，多忙なスケジュールの合間を縫って，大学や病院を訪ねたり，日本食，乳児福祉および農法に関するメモを作成したり，幼児や日本の生活シーンを写真に収めたりしながら，日本固有の植物種の種子や日本独特の物品の収集に奔走した．そしてこの日本での経験は，ニュージーランド帰国後の彼らの生活に影響を与え続ける結果となったのである．

彼らは帰国後早速，南島オタゴ湾沿いの所有地を日本庭園風に造園した．同様の様式の庭園は，後にウェリントン郊外のメルローズ（Melrose）の丘の上にある彼らの自宅でも見られることとなった．また，キングは，帰国後間もない時期に，科学的な日本の農業およびその保育の理念・手法をニュージーランドで普及させうる可能性に関する一連の講演を行っており，日本滞在の影響はそこにも現れている．さらにキングは，保健に関する数多くのプログラムの開発・実践に携わったが，そこにも，彼の日本での経験が活かされていた．

キングの日本訪問の経緯と帰国後のさまざまな活動は，当時のニュージーランドの知識階級に影響を及ぼした知的要素が西欧・北米由来のものに限られないことを示唆している．また，同じ事実は，「国家の近代化をどのように進めていくか」という課題がグローバルなものであったことをも物語っている．すなわち，効率的・効果的な国家運営には，新しい科学技術の導入とともに，前近代的な社会的価値の保持が不可欠であることを，当時の政策決定者の多くが認識していたことがうかがわれるのである．

2. 歴史学的観点から見た保健に関する知識の伝達

19世紀から20世紀にかけての医学的な知識および医療技術の伝達に関する研究の大半は，西洋医学がその他の地域に及ぼした影響に関するものである[4]．日本の場合は，明治時代（1968～1912年）に始まる制度改革の一環として，西洋医学（とくにドイツの医療技術および教育制度）の影響が考察されている場合が少なくない[5]．ニュージーランドに関しても，基本的な研究動向は同様であり，イギリスやアメリカの医療技術や関連制度が同国の保健政策に及ぼした影響についての分析がなされてきた[6]．しかしながら，本稿を通じて筆者らが指摘したいのは，これらの既存研究が，アジアを起点とする興味深い知識の融合の実態を看過してきた可能性である．すなわち，19世紀後半の相互に絡み合ったグローバル社会の存在を前提とするならば[7]，たとえば，日本とニュージーランドという二つの国における知識の交流が，車軸や複雑に交差するクモの巣を連想させるような，相互的なものであったと考えることも不合理ではない．本稿で明らかにするように，当時の日本は，急速な近代化を進めるために，政府主導で保健政策を推進していた．かかる動きは，北米およびヨーロッパ諸国の制度動向に触発されたものではあるとはいえ，ニュージーランドの政策決定者には，まさに自らが直面していた課題（前述した「国家の近代化をどのように進めていくか」という課題）への実践的な対応であるように映った．キングが，国民の健康の確保という領域への政府介入の増大を支持するに当たっての社会モデルとして日本を捉えたことの背景には，そうした事情が存在している．実は，日本は，歴史的に，こうした役割を果たしてこなかったわけではない．ロガスキ（Ruth Rogaski）が最近の著書で明らかにしたように，20世紀初頭まで，日本は，中国に西欧的な思想が導入される際の導管として機能していた[8]．同じように，明治期における日本の保健制度改革は，キングにとって，成功した社会モデルのように捉えられたのである．

しかし，既存研究において，キングの保健理論や彼が設計・運用した政策の特徴は，北米的またはヨーロッパ的なものとして紹介されるのが常であった[9]．また，彼の日本およびその文化等への傾倒と同様に，園芸家および環境保護主義者としてのキングの実像もまた，ほとんど知られていない[10]．キングの1904年の日本訪問が彼の保健理念の発展に及ぼした影響については，ニュージー

ランド母子健康協会の歴史に関する最近の研究書の中でブライダー（Linda Bryder）が簡潔に言及したことを除けば，ほぼ看過されてきた[11]．そうした事実が見過ごされてきた背景には，次のような事情がある．

一つは，キングの見解とイギリスおよびアメリカにおける主流な見解との間には，明らかな共通点が存在することである．西欧とのつながりはより特定しやすいだけでなく，ニュージーランドがイギリスの植民地であった点を考えるならば，日本よりはむしろ西欧とのつながりを前提とするのが通常的であろう．ブライダーおよびそれ以前では，スミス（Phillipa Mein Smith）が，キングの保健に関する理念がイギリスおよびアメリカの理念に基づいていることを検証している．ブライダーによれば，キングの乳児福祉への情熱は，ファルコナー（Alexander Falconer）との交流を通して生まれたものであるという．たとえば，キングに影響を与えたとされている幼児死亡率と母乳の重要性に関するマクリーリン（G.F. McClearyn）の著書（1905年公刊）をキングに紹介したのはファルコナーであったとされている．また，キングは，アメリカを代表する小児科医であったホルト（Luther Emmett Holt）が唱える幼児養育の重要性に関する思想に影響を受け，1907年に発行された自身の著作にホルトの思想が反映している点を認めている[12]．

もう一つは，キングに関する研究に従事している側の事情である．論者の多くは，当然のことながら比較的入手しやすい出版物，またはニュージーランド母子健康協会に関する記録文書を主な情報源として利用してきた．こうした情報源の選択には，新聞よりも記録文書や出版物を好む歴史学者の一般的な特性が表れている[13]．

しかしながら，キングの日本に対する関心は，当時の新聞報道および日本に関する記録文書，すなわち，ニュージーランド母子健康協会関連文書として明確に分類されていない多種多様な文書から読み取ることができる．本稿では，そうした新聞記事および記録文書によって裏付けられるキングの日本への多様な関心に焦点を合わせることで，キングの知られざる一面を描き出そうと試みた．かかる知見は，キングの保健理念が，日本の科学的な農業，保健の理念と手法，および独特の造園文化と技術等を総合的に理解した上で醸成されたことを理解する助けとなるであろう．

保健理念・政策と農業や造園との「つながり」は，歴史研究の射程外におかれてきた[14]．その背景には，20世紀の初頭以降，知識の細分化および専門化が進み，人々が宗教，科学，保健および保全等を別個の分野として捉えるようになったという事情がある[15]．これによって，分野間の垣根はより高くなり，分野間の分断も促進されてきた．それぞれの専門分野には固有の学習・研究方法が存在し，それによって分野間の境界が築かれ，結果として専門分野別による下位分野の定義が進められていく．実際，歴史学者の多くは，保健，園芸および保全を別個の分野として捉えてきた．こうした捉え方に従うならば，保健は医学史学者，園芸は園芸史学者，保全は環境史学者の領域にそれぞれ属することになるだろう．しかし，専門分野別に，ある個人の人生を捉えるだけでは，その個人の知的世界の実態からは，逆に遠ざかってしまう見込みが少なくない．筆者らは，むしろ，その個人のさまざまな側面間のつながりを探求してこそ，その個人の知的世界の実態に近づき，その時代に関する貴重な見識を得ることが可能となるものと考えた．

キングの思想および彼が積み上げた研究業績には，園芸，科学的な農業および保健の理念・手法といった，他種多様な関心が混在している．それは，キングの1904年の日本訪問についても言えることである．ニュージーランドは日本の乳児福祉および母乳育児を見習うべきであるというキングの信念は，同様の主題についてアメリカおよびイギリスで公刊された書籍との出会いと時を同じくして芽生えたものであった[16]．キングの日本への傾倒と日本の保健理念・手法のニュージーランドへの適用可能性に関する議論は，日本から帰国したすぐ後に行われた一連の講演においても言及されている．さらにニュージーランド母子保健協会設立のきっかけとなった会議でも，キングは

ニュージーランドにおける協会設立の根拠として日本で見聞したいくつかの事例を紹介している．まずはキングとベラによる1904年の日本訪問それ自体について紹介したい．

3. ジャポニズム

1904年5月，キングのもとに朗報が届いた．シークリフ精神病院（Seacliff Mental Hospital）の管理責任者であったキングが申請していた6ヶ月の休暇が認められたのである．結核と過労に苦しんでいたキングは，しばしば精神的に不安定な状況に追い込まれていた[17]．彼らの日本への訪問は，裕福で教養のあるニュージーランド人の間で日本旅行への人気が高まる一方で，日本人の西洋諸国への移住が増大していた頃と時期を同じくしていた．

欧米人の日本への憧れは，19世紀の終わり頃までには頂点に達していた．数世紀にわたった反鎖国状態の後に再び開国し，目覚ましい「近代化」を遂げた日本とその国からもたらされる物品は，（中国において王朝制が崩壊した影響もあり）海外から多くの関心を集めるようになっていた．観光客として訪日することが可能な，限られた裕福な人々は，日本の「発展」とそこに住む人々の生活に驚嘆した．西洋諸国には日本から無数の物品が流れ込み，またその多くが博物館や美術館に陳列されるようになり，多数の人々が日本について何らかの情報を得られるようになった．西洋諸国の日本への関心はその装飾美術品にも見られるようになり，特に日本美術および日本工芸と西洋的なデザインとの融合は「ジャポニズム」として知られるようになったのである[18]．ニュージーランドでも，日本への関心と日本からのもたらされる物品への需要が高まっていたが，同じ時期に，移民や安全保障の観点からは，日本に対する警戒心が高まっていったとの指摘もある[19]．

「「日本的な何か」を伴う最近の傾向」という1882年の新聞記事[20]の予想に反して，日本の物品への需要はその後数十年にわたって拡大し続け，その傾向は（1910年に開催された日英博覧会の影響もあり）20世紀に入っても観察することができた．美術史家のピーターセン（Anna Petersen）は，ニュージーランドの日本製品の年間輸入額が1881年の95ポンドから1884年の10,393ポンドに跳ね上がった点を指摘している[21]．また，ベル（David Bell）によれば，ニュージーランド人による日本の版画の収集もまた，19世紀から始まったという[22]．

物品への需要と同様に，知識への需要も高まっていた．当時のニュージーランドの専門誌および新聞には，日本に関する多くの記事が掲載されている．海外の出版物を引用して書かれたもの，訪日経験のあるニュージーランド人により執筆されたもの，および日本語から直接翻訳された文書に基づいて書かれた記事などである．内容としては，園芸および華道の作法，七宝焼等の芸術作品の作り方，日本における近代化および日本人による海外移住，ならびに拡大傾向にあった日本の軍事力や軍事的な成功に対する懸念などが人気のある話題として，頻繁にとり上げられた．また，ニュージーランドの演劇や音楽，そして広告にまでも日本的な様式がとり入れられるようになったことも興味深い事実である．時には広告の一部として日本のキャラクターが使用され，適当な日本のキャラクターが見当たらない場合は，日本生まれと称するキャラクターが使用されることさえもあった[23]．1882年以降ニュージーランドへの寄港を開始した日本海軍実習船もまた，日本の評判（および日本に対する関心）を確固たるものにするうえで重要な役割を果たした．実際，19世紀末から20世紀初頭の新聞に，日本をテーマとするパーティーに関する記事を目にすることや，「日本の」ゲームを楽しむ「着物」を着たヨーロッパ人の写真を発見することは，決して珍しいことではなかったのである．

1900年代までには，ニュージーランドの富裕層の多くが，日本への知的なかかわりを始めていた．日本を実際に訪れ，定住する人たちが現れるようになったのである．メイジャー（Frank Major）アルドリッチ（Alfred Aldrich）などは，日本で相当な期間を過ごした人々の代表といえるだろう．メイジャーは，1868年に大阪に貿易会社を設立

したほか，兵庫新聞社の特派員を務めた人物である．日本人妻の死後，1878年にメイジャーと彼の3人の子供たちはニュージーランドに帰国した[24]．一方，土木技師のアルドリッチは，日本の鉄道システムの発展に一役買った人物である．アルドリッチは，25年間日本で暮らしたあと，1897年にニュージーランドに永住帰国し，ニュージーランド名誉領事の職を務めた．名誉領事としてのアルドリッチについて，マクニール（Ken McNeil）は，「日本政府から授与された勲章と刀を身にまとい，ウェリントンにおける公務において，素晴らしい異彩を放った」と述懐している[25]．

これらの人々が習得するに至った日本語および日本人に関する知識は，出版物や物品，または観光旅行を通して日本という国を知りえた大多数の人々の知識をはるかに上回っていた．1900年代の初頭までに日本を訪問した数十名程度のニュージーランド人は，日本における富の拡大，ならびに植民地社会的な風潮が日本全体に根付きつつあることを一様に強調している．多くが中産階級層で占められていたこれらの人々にとって，日本の物品を収集したり日本に旅行したりすることは，画廊や博物館を開業したり，科学，音楽および文学に関する団体を設立したりするのと同様に，彼らの階級意識や社会的な欲望を満たすうえで重要な役割を果たしていた．

ロード（Jessie Rhodes）とその夫は，日本への多くの訪問者がそうであったように，1892年の7月から9月までの3ヶ月間にわたり，日本を新婚旅行で訪れている．彼らは一般的な日本の観光名所を回り，ロードはその一部始終を日記につづり，たんす，座布団，ちょうちん，とっくり，丼，着物などの物品をニュージーランドに持ち帰った[26]．他方，1880年代初頭に自らの交易船を2度横浜に寄港させている，貿易商であったネイサン（L. D. Nathan）は，こうした典型的な日本熱とは異なる関心を持っていた．1902年に彼がオークランド博物館に寄贈した日本製の仏壇は，ニュージーランドの博物館で現在でも保管されているいくつかの仏壇の一つである[27]．

芸術または科学に関する関心や興味を満たすために日本を訪れた人々もいた．写真家のチャンス（George Chance）は，20世紀初頭に撮影旅行で日本を訪れている．収集家で医師のホッケン（Thomas Morland Hocken）は，日本で二度の休暇を過ごしている（1900年および1904年）．ホッケンは東京帝国大学を訪れ，その「世界の他のどの大学にも匹敵する素晴らしさ」に驚嘆し，帝国大学に勤めていた友人から科学的な農林業に関する情報や浮世絵などを入手したとされている．その後ホッケンは，オーストラリアのビクトリア州およびタスマニア州の農業省と日本との橋渡し役として活躍したほか，オーストラリアおよびニュージーランドで日本の文化や科学技術に関する講演を数回行っている[28]．

4. キング夫妻の日本への旅立ち

キング夫妻は，チェンバレン[29]の著書を含む一連のガイドブックを手に，1904年8月8日にリトルトン（Littleton）を出港し，シドニーでChingtu号に乗り換えた．そして，香港およびマニラを経由したのち，9月22日に神戸に上陸し，11月10日に出国した[30]．渡航ルートの概要は，図1のとおりである．

彼らの日本旅行記は，ベラが管理していたキングのスケジュール帳，ベラの雑記帳（そこにはキングによる書き込みも残されている），およびベラが友人に送った手紙の写し（娘のメアリー・キングが執筆したキングの伝記に含まれている）という，主に三つの形で残されている[32]．残念なことに，キングが撮影したとされている写真の多くは，筆者らが知る限りでは現存しておらず，また，彼らがニュージーランドに持ち帰ったとされている物品の多くについてもその在処は判明していない．次世代の歴史家が，こうした物品を目にする日が来ることを望むばかりである．

5. 日本と近代化

キング夫妻が訪日した時期の日本は，明治時代の指導者の下，目覚ましい変動期を迎えていた．明治政府は西洋の科学技術によって国家の近代化を図ったが，それと同時に西洋的な思想や慣習を

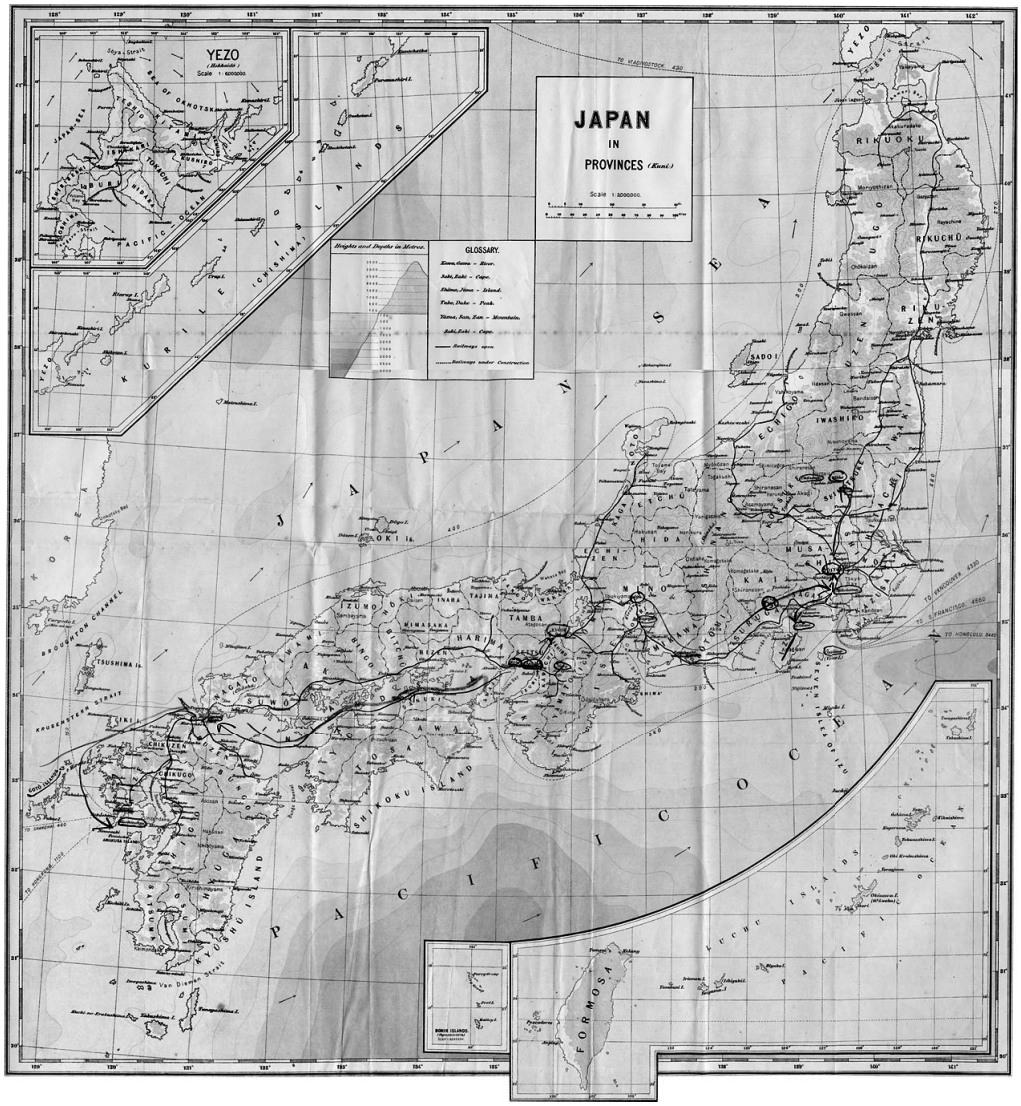

図1　キング夫妻の日本旅行ルート[31)]

選択的に導入することで，日本文化の温存に努めた[33)]．この時期に日本を訪れることは，西洋社会に長年閉ざされてきた国家を観察する，絶好の機会であったといえるだろう．キング夫妻もやはり，他の多くの人々と同様に，この旅行を日本だけでなく自国の「発展」について考えるための機会としてとらえていた．キングは，日本の急速な近代化を大いに称賛し，ニュージーランドも日本の経験から学ぶことができると考えていた．こうした考え方には，スペンサー流の適者生存理論に支配されていた当時の世界的風潮が垣間見える[34)]．

キングは，チェンバレンの分析に全面的な賛意を示し，「日本は帝国主義の時代に存続できる国」であると考えていた[35)]．キングは，1905年7月，ダニーデン（Dunedin）で講演し，ボーア戦争で「イギリス軍に欠如していた度胸と力強さ」と「日本人の品行に関する高い理想と高い肉体能力」とを引き合いに出し，日本を称賛した[36)]．また別の講演では，日本人について，世界で最も「若く……原始的で力強い」国民であると評している[37)]．

6. 日本庭園と日本の植物

キング夫妻は，日本滞在中に多くの庭園を訪れ，日本固有の植物種を多数収集した[38]．1904年10月の中旬，ベラは，札幌ビアガーデンは「風変りな松の木と石灯籠と橋との調和がとても美しく」，その「丘の上」まで続く「飛石」および「たくさんの小道」は非常に魅力的である，と書き綴り，キングはそれらの写真を撮影している[39]．二人は続いてNujako（原典表記のとおり．場所の特定不可）の個人庭園を訪れ，その日の午後にキングは写真撮影のために同じ場所を再訪している[40]．

キングは，庭園や公園をただ訪ねるのではなく，機会があるたびに日本固有の植物の種子の収集に努めた．たとえばAwata（原典表記のとおり．場所の特定は不可）の個人庭園では，「状態の良い樹木からカエデの種子を採取」している[42]．また，紅葉の時期の中禅寺湖の美しさとその「言い尽くせない」色合いに魅了された二人は，レークサイドホテルへの帰り道，「帰国したらニュージーランドで植えるために『集めた』種が入った品種別に分けられた封筒に封をした」[43]．さらに，二人は，横浜市内の種苗場を訪れ，「ニュージーランドに送ってもらうための植物」を注文している[44]．帰国後，キングは日本庭園および日本の植物の美学に独自の脚色を加え，自宅に，「飛石および日本風のあずまやを設置し」，日本滞在中に収集または注文した「野生のリンゴとカエデ」を植えた[45]．

しかし，キング夫妻の日本庭園への関心は，日本的な美学に対するより幅広い興味の一端をなすものにすぎなかった．彼らは，着物，壁掛け，絵画，漆塗りのお膳，食事用食器セット，提灯などを大量に購入し，ニュージーランドへ持ち帰った[46]．ベラは帰国後，こうして芽生えた日本的美学への関心をさらに発展させ，日本の慣習に関する独自の解釈に基づき，自宅に雑然と飾られていたビクトリア朝後期およびエドワード朝様式の装飾品の大半を片付け，代わりに少数の物品を定期的に入れ替えて展示する形式を採用するようになった[47]．

キングがニュージーランドに持ち帰った日本の植物および庭園様式は，19世紀後半頃から認識されるようになった「ジャポニズム」よりも広範囲な美的様式の確立に貢献した．西洋の植物収集家は，新しくて美しく，そして希少な日本の固有

図2　当時の京都の私有庭園[41]

種を手に入れるために競い合っていた．ヨーロッパ諸国やアメリカでアジアの固有種の入手が可能になったことは，輸送技術の発展および中流階級の購買力の向上と相まって，余暇の充実および園芸が世間体の良い娯楽としてもてはやされる一因となった[48]．そうした影響がニュージーランドの園芸趣向に現れ始めたのはやや遅かったが，ニュージーランドの植物収集家は，大凡1870年ごろから，日本およびその他のアジア地域に固有の植物種に多大な関心を示すようになった[49]．たとえば，1870年代に，ニュージーランドの種苗場で刊行された目録のいくつかには，多くの日本の固有種が掲載されている[50]．また，1903年の新聞記事には，「菊やユリのような最も美しいとされている花に関し，わたしたちが日本から恩を受けていることはだれもが知っていることであり，最近では，日本固有の果樹種も多く出回るようになった」との記事が見られる[51]．なお，そうした希少種が有する文化的な意味[52]と関連して，キング夫妻の日本の固有種への関心が「ジャポニズム」の外延拡大に貢献したとの指摘もなされている[53]．

西洋における日本庭園ブームは，日本植物の場合と同様に，19世紀末にまでさかのぼり，そのきっかけとなったのは日本庭園に関するいくつかの書籍であったと言われている．その中でも最も有名なのが，イギリスの建築家であるコンダー（Josiah Conder）による『Landscape Gardening in Japan』（1893）である．この著書は，19世紀から20世紀への変わり目の前後に多数出現した日本庭園の建設に，少なからず影響を与えたとされている[54]．加えて1910年に開催された日英博覧会も，この傾向を増幅するのに役立った．博覧会でひときわ注目を集め，世界中で数多くの日本風庭園が建設されるきっかけとなった「日本」庭園を，多くのニュージーランド人が見に訪れたのである[55]．これらの点を踏まえると，日本庭園の美に関するキングの解釈は，時期的に非常に早かったうえにその内容も独特で，筆者らが知る限りでは，ニュージーランドではそれまでに例のないものであった．

それでは，なぜキングは自ら日本庭園を建設しようと思い立ったのであろうか[56]．この問いへの回答に直接結びつく手がかりは，ほとんど存在しない．現在はオタゴ大学医学部図書館に保管されているキングの蔵書から確認しうることは，キング夫妻が訪日の際に携えていったと思われるガイドブックの中で，日本の園芸についてふれているのはチェンバレンの著書のみということである[57]．キングが同書を読んだ可能性は非常に高いが，何か重要性が認識されていたのであれば，彼がいつもしていたように下線か書き込みがあってもおかしくはない．しかし，チェンバレンの著書に含まれている日本庭園に関する節には，そうした痕跡が一切見当たらないのである．また，ニュージーランドへの帰国後においても，キングが，コンダーの『Landscape Gardening in Japan』をはじめとする日本庭園の造園関連の書籍を購入した記録は残っていない[58]．他方，キングはニュージーランドへの帰国後すぐに，日本人を「園芸に対する天性の才能の持ち主」として称賛し[59]，先に記したように，多くの日本庭園を写真に収めている．これらの諸点に照らすならば，キングが建設した日本庭園は，彼自身の創造力と，日本での経験から生まれたものであるように思われる．

キング夫妻の日本への憧れは，1920年代に入っても冷めやらなかった[61]．1921年，キングが児童福祉長官に任命されたのを機に，夫妻はウェリントン市のメルローズに住宅を構えたが，彼らが造築した家屋と庭は，クック海峡を見渡せる高台に位置し，かなりの異彩を放っていた（図4）．

日本文化への彼らの傾倒は，家屋と庭のデザインに表れている．たとえば，キングは庭を造るに当たって，日本の固有植物種を専門に扱う種苗場（V.N. Gauntlett & Co., LTD）に多くの植物を注文している[63]．とくに，彼らは，カエデに関しては強いこだわりを示した[64]．

メルローズの庭園は，図面どころか大まかな全体図さえない状態で建設されたもので，メアリー・キングによれば，キングの記憶および発想に基づいて作業が進められたという[65]．しかし，仮に明確な図面が存在していなかったとして

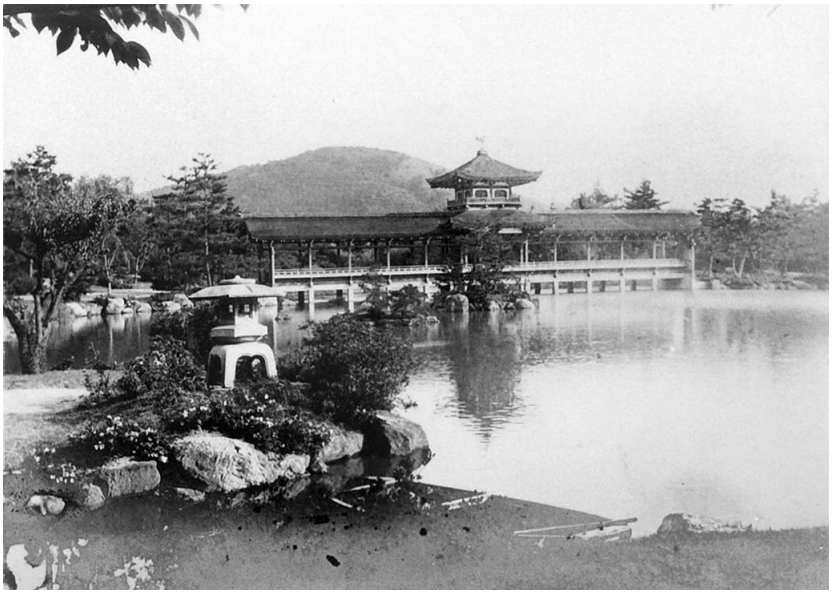

図 3　当時の京都の日本庭園[60)]

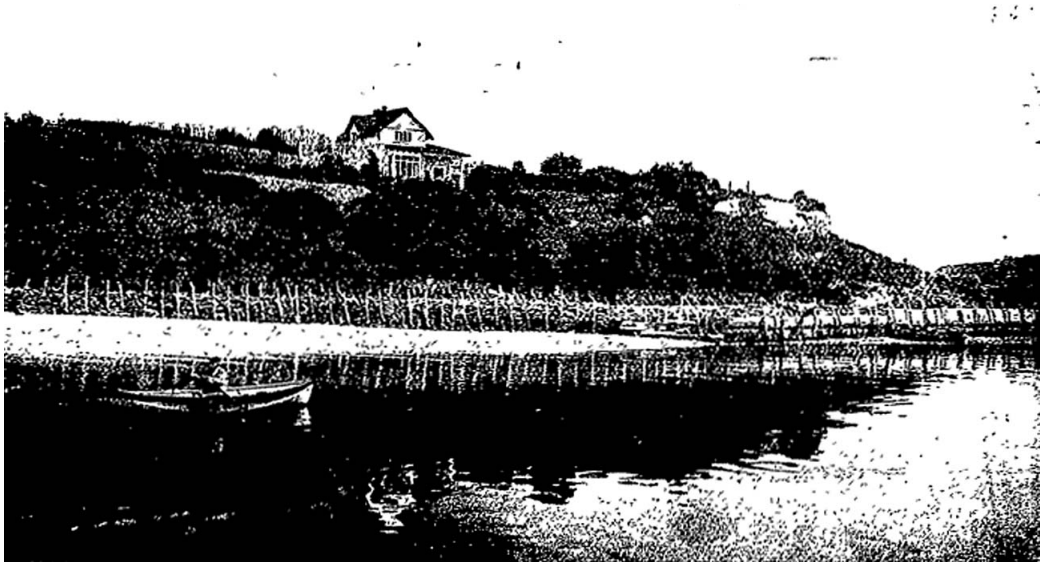

図 4　キング夫妻の家屋[62)]

も，さまざまな要素がこの庭園の建設に影響を与えていたことに間違いはない．ロブソン（David Robson）は，1950年代にバワ（Geoffrey Bawa）がスリランカで設計した「ルヌガンガ（Lunuganga）」について，「ヨーロッパおよびアジアの造園技術が融合され景観」は「無二かつ他にたとえようがない」と説明しているが，メルローズの庭園は，まさにそうした描写がふさわしいものであったように思われる[66)]．メルローズの背の高いアーチ，その円形の開口部および支柱，中国風のムーンゲート，および日本独特の仏塔（全部で4つあったがその後撤去された）は，キング夫妻の家屋お

図5　キング夫妻の家屋[67]

よび庭の建設に日本的な美学が果たした役割を象徴している（図5）.

キングは「古びた船舶に取り付けられていた提灯」を購入し，日本庭園に訪れた際に目にしたであろう方法でそれらを飾り付けた．キングは，これらの提灯を「家の周りの低いれんが壁に」さまざまな角度から光が発せられるように，また，提灯の美的効果が活かされるように意図的に「設置した」のである．これらは，日本国内の庭園で見られる日本の「提灯」を思い起こさせる要素であるという[68].

7. 良好な環境と健康

メルローズの自宅はもちろん，キングが運営に関与していたカリタネ病院（Karitane Hospital）にも，良好な環境が持つ効能に対するキングの信念が，物理的かつ空間的に表現されていた．キングは，原生自然および二次的自然の両方を含んだ「環境の保全」と「質の高い育児（養育）」が人間，植物および動物に対して，総合的な健やかさをもたらすであろうことを信じて疑わなかった．キングは，著書（『The Feeding of Plants and Animals』）の中で，「若い生命体」の健康について，「動物の場合と同じように，植物にも常に十分な栄養を与え，健康な状態に保つことが，一番の病害対策となる」と述べている[69].

キングは，科学的な知見を重視しつつ，情熱をもって多くの社会問題と対峙した．「科学者としての経験を通じて，物事を正面から見据える能力を身に付けるに至った」「鋭敏でかつ注意深い観察者」と評されていたキングは，「医療専門家特有の几帳面さと潔癖さを持っていた」という[70].

キングは，1886年にエディンバラ大学で医学博士号（外科学専攻）を取得するとともに，1888年には新たに公衆衛生学の学位を取得するための一連の教育を受け，総合的な洞察力を高める機会を得た[71]．キングが教育を受けた時期にはすでに，医学の分野における専門化が進みつつあったが，複数の専門分野に通じたいと考える人々の意欲を妨げるほどに専門分野間の壁が高いわけではなかった[72]．実際，キングの環境問題への関心は，公共衛生学の趣旨とおおむね一致していた．公衆

衛生学は，疾病の解明および治療において，自然環境を含むあらゆる種類の要因を考慮するよう医者に呼びかけていたからである．なお，キングの環境問題への関心は，農業に対するキングの強い関心に基づいていた．メアリー・キングが指摘するように，「キングは何よりもまず……科学的な視点を持った農業者」であり，健康に関する彼の論稿は，この点を踏まえて読まれ，解釈されるべきであろう[73]．キングは，幼児，精神障害者または病弱な児童を含んだ人間の養育・管理にも，科学的な農業の理念，すなわち，綿密な観察と系統的方法論に基づく慎重な追肥と水やりという理念を一貫して当てはめていたのである．

キングは，その鋭敏な知性と豊かな経験を，20世紀初頭のニュージーランドにおける数々の社会問題（例：高い幼児死亡率や公害）の解決に活かそうと試みた．「その時代を代表する知識人の一人」[74] であったブラウン（John Macmillan Brown）（カンタベリー大学教授）は，当時のニュージーランドで高まっていた社会不安の実態について，次のように述べている．ブラウンは，同国における「スラム街および悪徳の出現」に焦点を当て，白人の「堕落」を非難したうえで，ニュージーランドの（白人）「人口の源および才能」は「枯渇している」と警告した[75]．都市型の生活スタイルは，多くの専門家が賛同しているように，性同一性障害や不妊が増加する原因として挙げられていた[76]．また，第一次世界大戦（1916～1918）のために徴兵されたニュージーランド人のうち，健康であると医師によって診断されたのは全体の34%に過ぎなかった[77]．国内の母親たちもまた，健康を手にすることができず，乳幼児の死亡総数も許容し難いほどに高くなっていた[78]．とりわけ，最後の問題について，キングは，1925年に「崇高な母親像は民族の成功と国家の繁栄には欠かせない最も重要な要素である」と述べている[79]．

8. 日本の保健理念・政策とニュージーランド

前述したような問題群は，ニュージーランドでのみ観察されたものではない．それらは，アジア地域における覇権の定着を目指していた日本の政策決定者をも悩ませていた．西洋の科学技術を選択的に導入することで近代化を図ろうとしていた明治政府の指導者たちにとって，国民の健康の確保は最大の関心事の一つであった．それは，健全な民族国家の基礎となるだけでなく，アジア地域における覇権の掌握と維持のために必要となる強靭・有能な軍隊の基盤となるものでもあったからである[80]．

プロイセン帝国その他のヨーロッパ諸国の公衆衛生行政を参考にして，日本の保健衛生に関する調査および管理体制は，1880年代までには確立されることとなった[81]．行政組織としては，1873年に文部省内に衛生局が設置されている．同局は，1874年に内務省へと移管され，内務省衛生局として関連事務の遂行に従事することとなった．当時の内務省における予算の3分の1以上が衛生局に配分されていたことは，政府が公衆衛生行政にかけていた意気込みを物語っている．国民の健康に関するデータの収集を専門とする統計課も，その当時すでに発足していた．

軍隊の健康に関する懸念は，1894～95年に勃発した日清戦争を契機として高まることとなった．この戦争を通じて，個々の兵隊の体力不足と軍隊としての規模の小ささが浮き彫りになったからである．こうした不安に対応するために，1898年，衛生局内に学校衛生課が設置され，同課には，児童の健康を向上する任務が与えられた．同課が主導した健康促進事業に基づき，児童の体重，身長およびその他の健康に関するデータが年に2回の頻度で測定されるようになり，子供たちは健康な生活に関する指導を受けられるようになった[82]．キングは1904年の訪日中に，日本におけるこうした公衆衛生システムの近代化を目の当たりにし，さまざまな現場を訪ねることを「切望して」いたという[83]．

ベラは，大阪の陸軍病院を訪れた際に，キングが「その簡素な造り，完璧なまでの居心地の良さ，および細部に至るまでの清潔感」に感銘を受けていたと記している[84]．残念なことにこの訪問に関するキング自身によるメモは発見できなかった．

しかし他の場所で発見された証拠には，キングが日本における「科学の近代化」を記録することに意欲を燃やしていたことがはっきりと示されている．

たとえば，キングは，日本で生産されている農産物や一般の日本人の食事の内容を詳細にメモし，耕作の様子や農機具等を写真撮影し，さらには，実際に日本人が使用していた農機具をニュージーランドにまで持ち帰った[85]．また，キング夫妻は，日本訪問中に，おそらく京都府立農林学校（現在の京都府立大学）と思われる農業専門学校を訪れている．1895年に京都府簡易農学校として設置された同校は，キング夫妻の訪問に先立ち，葛野郡桂に移転していた[86]．その立地場所は，京都の中心部から人力車でいくつかの郡を通り抜けたというキング夫妻の述懐と符合する．キングは，この専門学校，その学生，そこで教授されていた作物の栽培方法やその際に使用されていた農機具等について，詳細なメモとスケッチを残した．そのメモによれば，この学校には当時160名の学生が在籍し，その大半が葛野郡の出身で，卒業後は家族が経営する農場で働くことを目的としていたという[87]．こうした専門学校は，農家の子弟に，一般的な高等教育を授ける場としても機能していたように思われる．明治時代初期における日本の農業専門学校の大半は，札幌農学校のような例外を除けば，高等教育機関としての社会的地位は与えられていなかった[88]．

日本訪問以前から，キングにとって，農業，環境，健康は分かち難い関係にあった．キングは南オタゴで農場を経営する一方で，ダニーデンのシークリフ精神病院の管理責任者を務めていた（1889～1920年）．そこでキングが試行したのは，精神病患者の治療における野外活動プログラムのとり入れである．良好な環境が健康の増進を促すという仮説の下に，キングは病院内の敷地の一部を農場に造りかえた．病院内の農場から収穫された新鮮な農産物を摂取することには治療的な意味もあったが，この取組は，病院内の食料自給率を高めるという二次的な効果をも生み出した[89]．キングは，精神病患者の健康増進に必要とされていた食料と労働の両方を，農場の設置と運営によってもたらしたのである．

1904年の日本訪問を通じて，キングの「自然への復帰は，それだけで民族を衰退から救うことができる」という考えはより強固なものとなっていった[90]．1905年にウェリントンで開催された「日本の農村教育に関する農業畜産会議（Agricultural and Pastoral Conference on Rural Education in Japan）」で講演したキングは，日本について，その地域社会が工業的な発展という側面からは立ち遅れているとしながらも，その一方で，農業および農業政策が相当に洗練されたものである点を報告している．そして，国が設立した試験農場を例に挙げて，日本が科学的根拠に基づく農業を推進し，それを国家の発展に結び付けているという政策面での先進性を指摘した．さらに，キングは，日本が自らの科学的専門知識を満州で「大規模に」適用するであろうことを予測したうえで，日本的な農業政策のニュージーランドへの適用可能性に関する議論を展開している．この他に，キングは，日本人の野菜を主体とする食生活についても言及し，「日本人は，土壌から生産される食物を自らがじかに耕作し消費することで，家畜飼料の生産にまつわるゴミの発生を抑え，ほとんどのヨーロッパ諸国を上回る効率性を実現している」との所見を述べ，その効率性を称賛した[91]．

キングの講演内容は，日本の保健政策へも及んだ．この会議の席で，キングは「西欧諸国が日本人に最も見習うべきことは，作物の育て方ではなく，むしろ人間の育て方である」と述べ[92]，聴衆に言葉巧みな質問を投げかけた．すなわち，都市化の拡大にもかかわらず，なぜ日本人には「ニュージーランドを含んだ他の文明社会で顕著となっているような肉体的な劣化傾向」（例：不妊の増加）がみられないのだろうか，と[93]．このように問いかけた上で，キングは，日本人が都市化をよそに「自らの基本的な美徳と自然との直接的な対話に基づく健全かつ活動的な野外生活」を保ち続けることによって，「日本女性は健康な子供を生めるだけでなく，誕生後も適切に子供を育てることができている」と指摘した[94]．キングは，

自らの国が抱えていた問題の多くは，地方暮らしや母乳育児を中心とする自然な育児により，少なからず解決に導かれるであろうと考えていたのである．

当時のヨーロッパでは，「自然の定めにより乳児に与えられるべき食料が，有毒で時には人を死に至らしめることもあり，そして人間のさまざまな機能を低下させる危険性を有する畜乳により代用されていた」[95]．これに対して，キングは，母乳育児がより安心・安全な「人間の育て方」であるとして，その重要性を訴え続け，その後，ナチュラル・フィーディング（母乳育児）は，ニュージーランド母子健康協会が掲げる座右の銘の一つとなったのである．この議論において，日本は重要な国であった．ニュージーランド母子健康協会の前身である母子健康促進協会（The Society for Promoting the Health of Women and Children）設立のきっかけとなった会議で，キングは，ダニーテンの町役場に押し寄せた満員の観衆に向かって，彼の日本での経験を引き合いに出した．キングは，母乳育児を基本とする日本という国の「勢い，活力および度胸のいずれも失っていない国民」の姿を成功例として示し，ニュージーランド女性が母乳育児を選択することにより得られる利点を強調したのである[96]．

ただし，内務省衛生局統計課の調査結果では，日本における幼児死亡率の増大傾向は，1890年代から表れ始め，1920年代まで続いていた[97]．最近の研究では，キングによる日本訪問前後の時期には，幼児死亡率は上昇，または少なくとも大幅な低下を達成するには至っていなかったことが指摘されている[98]．ゆえに，キングは，日本の幼児死亡率の傾向を誤解していたか，または誤って解釈していた可能性が高いが，彼が日本の「自然な育児」を，彼の乳児保育に関する考え方を広めるための手段として利用していたのは前述のとおりである．

仮に日本の乳児福祉に対するキングの称賛が勘違いによるものであったとしても，彼の日本の初等教育における児童福祉政策に関する議論は，より正確な評価に基づいていた．前述のように，1898年に，内務省衛生局内に設置された学校衛生課が主導した健康促進事業に基づき，児童の体重，身長およびその他の健康に関するデータが年に2回の頻度で測定されるようになり，子供たちは健康な生活に関する指導を受けられるようになった．この健康促進事業は1902年に開始されたが，その対象範囲は，全学校の30%（1902年）から8%（1918年）にまで拡大された．また，日本では，1902年にはすでに，9千人以上の学校医が，健全な生活の観点から児童に指導を行う体制が整えられている[99]．1907年3月5日，英国医師会ニュージーランド支部で講演したキングとメイソン（James Mason）（当時のニュージーランドの保健政策の権威）は，学校教育現場で健康診断を行う重要性を，そろって強調している．メイソンは，「全ヨーロッパ中の校医を上回る数の校医」が配置されている日本の「神業に近い」先見の明を称賛する一方で，次のように述べた：

> “日本が成しえた偉業は，ヨーロッパの科学者や政治家が長年にわたって議論してきた，そしていまだに議論し続けている保健政策案の多くを即座に実施したという，政策決定の迅速性と大胆さに起因していることを，ここではっきりと申し上げたい”[100]

同じ席で，キングは，学校において十分な健康診断が実施されないことにより，結核のような感染症が教育施設を通じて蔓延するリスクについて語っている[101]．こうした見解は，国内の全学校における十分な広さの運動上の確保，換気および日当たりを考慮した学校設備の充実，および国内の全学童を対象とする定期体重測定の実施等と並んで，キングの児童福祉政策論の中核の一つとなった[102]．

キングの議論には，当時の社会で支配的であった見解（そうした支配的な見解には，一定の思想が反映されていたことを忘れてはならない[103]）に歩調を合わせるかのように，「地方＝健康・高い道徳性」という昔ながらの価値観もちりばめられていた．キングは，「地方で育ったことが将来役

に立つことに間違いはない．都市は地方の精鋭たちを引き寄せる一方で，都会には変人以外の人間を繁殖させられる能力がない」と述べ，「もしまだ生まれていない人々が私の話に耳を傾けられるのならば，絶対に地方で生まれ，そこで育つように忠告する」とさえ述べている[104]．環境が人間形成に及ぼす影響の強さを認識し，子供にとっての遊び場の重要性を早くから提唱していたキングは，農村地域における教育機会の確保と農業手法の改善によって，ニュージーランドの都市化が抑制され，農村部から都市部への人口移動が抑制されることを期待していた．キングは，都市化が「国家の将来の福祉に深刻な脅威をもたらす」と考えていたのである[105]．

ニュージーランドの白人移住者は，1840年に同国が正式に植民地化されて以来，都市化および産業労働の拡大という現象を消極的に評価し，農業と地方での暮らしを称賛してきた．必ずしもすべての人にとっての現実ではなかったが，彼ら彼女らにとっての理想的な社会とは，大地に根ざした誠実な労働の継続が高く評価され，それが財産所有に結び付く社会であった．この理想化された開拓の概念は，強い家族のきずなにより築かれる地域社会を通じて完成をみた[106]．しかし，前述のように，都市化の進展とともに，出生率の急落，男性の女性化，および乳幼児死亡率の増加などの社会問題が現れ，19世紀末までには，ニュージーランドはもはやのどかな理想郷ではなくなっていた．思想家たちの多くは，そうした状況への対応策として，科学技術の合理的な利用や公共政策の発展，それに近代的な医療制度の導入や科学的根拠に基づく農業の推進などによって，さまざまな問題を克服し，モラルを回復させ，そして少なくても地方から都市への人の流出を抑制することができるのではなかと考えていた[107]．

ニュージーランドが見習うべき社会モデルとして，キングが日本に注目するようになった背景には，このような当時の社会状況があった[108]．キングは，ニュージーランドは，同じような島国である日本という国家が，殖産興業を進める一方で，いかにして産業社会以前の価値観や健全さを維持できたのか学ぶべきであると考え，日本を彼独自の健全な国家像に当てはめようとしたものと考えられる．キングは，日本の「質素な生活」が「健康で丈夫な男女の苗床である」と称賛し[109]，「日本の農村地域における素朴で質素な生活，日本女性の自然かつ健全な生活，および，次世代の利益のために決して自らの愛楽心を犠牲にしないという日本国民の決意」を褒めたたえた[110]．そして後年，カリタネ病院設立の理念について問われた際にも，「日本人は，われわれに比べて，物を個人的に取得・所有することにあまり興味がない．彼ら彼女らにとっては，美しい場所を訪れたり，美しく刺激的な物を見たりできる恩恵が時折与えられることこそが，大切である」という彼自身の気づきについて述懐している[111]．

9. おわりに

キング夫妻の健康に関する考え方や造園への情熱は，当時の社会的な風潮と，彼ら自身の特異な経験の両方によって育まれたものであった．彼らによって，日本という一つの国がこれほど頻繁にとり上げられていたこと，さらにその生活様式や美学さえもが同じ国からの影響下にあったことは，次のような問いを投げかける．20世紀初期におけるニュージーランドの文化生活は，これまでどの程度適切に描写されてきたのか．具体的には，大英帝国的な文化の一翼を担うという，これまでの一般的な理解に，ニュージーランドの歴史は本当に沿うものであったのかどうか[112]．

近年の諸研究が示すように，ニュージーランド人の生活に「アジア」が及ぼしてきた影響は，従来の認識をはるかに上回っている．すなわち，アジア地域で発祥した様式，物品および考え方が，西欧諸国全体の近代化の基礎となった知的，文化的および社会的構造の深部に及ぼしてきた多大な影響が認められつつある[113]．本稿の結論も，同じベクトルの上に位置づけられる．ベラとキングという20世紀初頭のニュージーランドを代表する知識人にとって，日本は，人種差別的懸念の対象でも，「黄禍論」の恐怖を裏付ける存在でもなかった．それはむしろ，彼らの美学，健康に関す

る考え方および造園手法が見事に凝縮された，理想的な社会モデルとして存在したのである．

日本を含めたアジア諸国とニュージーランドを始めとする太平洋諸国の隠れた「つながり」を解き明かす研究，すなわち，西欧中心的な歴史観を代替ないしは補足するような，アジア視点での複数文化的社会構造の発掘作業は端緒についたばかりである．今後の作業の積み重ねから，アジア太平洋地域における複雑に交錯した知識の交流とそこでの「奇妙かつ豊かな（strange rich）」知識の融合の実態が浮かび上がってくることを期待したい．

付　記

本稿の執筆に当たって，次の方々から有意義な助言を多数いただいた．Professor Brian Moloughney, Professor Emeritus Keiichi Oikawa（及川敬一 名誉教授）, Professor Emeritus Erik Olssen, Dr. David Bell, Duncan Campbell, Dr. Nadia Gush, Richard Bullen, Frank Boffa, Dr. Ken McNeil, Peter Shaw, Dr. Alistair Swale, Associate Professor Elise Tipton, Martin Wilkie, Petra Jane Edmunds, and the magnificent staffs at the Hocken Library and the Medical Library, University of Otago. ここに記して厚くお礼を申し上げたい．また，匿名の査読者からも貴重なコメントをいただき，おかげで中身を改善することができた．記して感謝申し上げる．なお，本稿は，ワイカト大学学術助成金（The Faculty of Arts and Social Sciences, University of Waikato, provided a Small Research Grant to facilitate travel and enable a research assistant to be employed），横浜国立大学グローバルCOEプログラム「アジア視点の国際生態リスクマネジメント」，および，平成20–22年度文部科学省科学研究費（基盤（c））「アメリカ環境法制における省庁間政策調整の法理と実際――NEPAシステムの包括的研究」による研究成果の一部である．

注

1）West Coast Times, 28 July 1905, p. 2.

2）1858年生まれ，1938年没.

3）1860年生まれ，1927年没.

4）代表的なものとして，Harrison M. Public Health in British India: Anglo-Indian Preventive Medicine, 1859–1914. Cambridge: Cambridge University Press; 1994. Kumar D. ed. Disease and Medicine in India: A Historical Overview. New Delhi: Tulika Books; 2001. Kumar A. Medicine and the Raj: British Medical Policy in India, 1835–1911. New Delhi: Oxford University Press; 1998. Rogaski R. Hygenic Modernity: Meanings of Health and Disease in Treaty-Port China. Berkeley: University of California; 2004など．一方，非西欧文化圏からの西洋医学への影響に関する研究としては，Arnold D. ed. Warm Climates and Western Medicine. Amsterdam: Rodopi; 1996などがあるが，その数は少ない．

5）たとえば，Low M. Science and the Building of a New Japan. Houndmills: Palgrave Macmillan; 2005. Frühstück S. Colonizing Sex: Sexology and Social Control in Modern Japan. Berkeley: University of California Press; 2003. Powell M & Anesaki M. Health Care in Japan. London; New York: Routledge; 1990.

6）たとえば，Dow DA. Safeguarding the Public Health: A History of the New Zealand Department of Health. Wellington: Victoria University Press in association with the Ministry of Health and with the assistance of the Historical Branch, Dept. of Internal Affairs; 1995. Dow DA, Maori Health and Government Policy, 1840–1940. Wellington: Victoria University Press in association with the Historical Branch, Department of Internal Affairs; 1999. Bryder L. ed. A Healthy Country: Essays on the Social History of Medicine in New Zealand. Wellington: Bridget Williams Books; 1991.

7）当時のグローバル化の進展状況について，Bayly CA. The Birth of the Modern World: Global Connections and Comparisons, 1780–1914. Oxford: Blackwell; 2004が詳しい．

8）Rogaski R. Hygenic Modernity: Meanings of Health and Disease in Treaty-Port China. Stanford: University of California Press; 2004参照.

9）King M. Truby King The Man: A Biography. London: George Allen and Unwin Ltd.; 1948. Parry G. A Fence at the Top: The First 75 Years of the Plunket Society. Dunedin: Royal New Zealand Plunket Society; 1982. Olssen E. Truby King and the Plunket Society: an analysis of a prescriptive ideology. New Zealand Journal of History. 1981; 15(1): 3–23. Smith PM. Maternity in Dispute: New Zealand, 1920–1939. Wellington: Historical Publications Branch, Department of Internal Affairs; 1986. Smith PM. Truby King in Australia: a revisionist view of reduced infant mortality. New Zealand Journal of History. 1988; 22(1): 23–43. Bryder L. A Voice for Mothers: The Plunket Society and Infant Welfare, 1907–2000. Auckland: Auckland University Press; 2003. Chapman L. In a Strange Garden:

The Life and Times of Truby King. Auckland: Penguin; 2003.

10）Beattie J., Heinzen J & Adam JP. Japanese Gardens in New Zealand, 1850–1950: Transculturation and Transmission. Studies in the History of Gardens and Designed Landscapes. 2008; 28(2): 219–236 および Wilkie M. Truby King the Gardener: "Commanding an excellent prospect". Part Two. Gardeners' Chronicle. 2009; 2(1): 23–32 参照.

11）Bryder 2003, p. 15 参照．なお，キングの保健理念と日本との関係については，King 1948, p. 151 にわずかな記述がみられる程度である．

12）Bryder 2003, pp. 11–14 参照．たとえば，自著の Physiological Economy in the Nutrition of Infants. New Zealand Medical Journal. 1907; 6(24): 71–102 の中に，日本への言及は見当たらない．

13）Ballantyne T. Archives, Empires and Histories of Colonialism. Archifacts: The Journal of the Archives and Records Association of New Zealand.（April, 2004）参照.

14）Beattie J. Colonial Geographies of Settlement: Vegetation, Towns, Disease and Well-Being in Aotearoa/New Zealand, 1830s–1930s. Environment and History. 2008; 14(4): 583–610 参照.

15）Gieryn TF. Cultural Boundaries of Science: Credibility of the Line. Chicago and London: University of Chicago Press; 1999 参照．ゲディス（John L. Geddis）によれば，人種，宗教，ジェンダー等を独立変数として認識する動きが進展する一方で，それらの変数間の相互関係が見失われていったという．Geddis JL. The Landscape of History: How Historians Map the Past. New York: Oxford University Press; 2002 参照.

16）日本が西欧諸国に「見習うべきもの（lessons）」を提供してきたという考え方は，Rosenstone RA. Learning from Those "Imitative" Japanese: Another Side of the American Experience in the Mikado's Empire. American Historical Review. 1980; 85(3): 572–595 などでも示されている．

17）当時のキングの状況については，ダニーデンのホッケン図書館（Hocken Library）（以下，HL）に所蔵されている次の書簡を参照した．D. MacGregor to Dr. F. Truby King, Inspector General's Office, Wellington, 19 May 1904, 74C*AG-007-005/028, HL.

18）ジャポニズムについて，Ono A. Japonisme in Britain: Whistler, Menpes, Henry Hornel and nineteenth-century Japan. London; New York: Routledge Curzon; 2003. Lambourne L. Japonisme: Cultural Crossings between Japan and the West. New York: Phaidon; 2005. Ferrall C., Millar P. & Smith K. eds. East by South: China in the Australasian Imagination. Wellington: Victoria University Press; 2005 等を参照.

19）ニュージーランドでは，日本人よりもむしろ中国人の移民に対する懸念が高まっていたとの指摘もある．Bennett N. White Discrimination Against Japan: Britain, the Dominions and the United States, 1908–1928. New Zealand Journal of Asian Studies. 1999; 3(2): 91–105.

20）The Press, 6 November 1882（未見）．この論評は，Petersen A. Signs of Higher Life: A Cultural History of Domestic Interiors of New Zealand c. 1814–1914（Ph.D. Thesis, University of Otago, 1998）, p. 105 で引用されており，本稿では当該部分を参照している．

21）Petersen A. New Zealanders at Home: A Cultural History of Domestic Interiors, 1814–1914. Dunedin: University of Otago Press; 2001. p. 85 参照.

22）Bell D. Framing the Land in Japan and New Zealand. Journal of New Zealand Studies. 2008; 15: 60–73. Bullen R., Bell D., Lummis G., & Payne R. Pleasure and Play in Edo Japan. Christchurch: Canterbury Museum; 2009．ビーティー J. 日本とニュージーランドの民間交流．青柳まちこ編著．ニュージーランドを知るための 63 章．東京：明石書店；2008．P. 270–273 参照.

23）たとえば，1922 年 10 月 2 日号の Ladies Mirror: The Fashionable Ladies' Journal of New Zealand の表紙や新聞記事（'Japanese Flower Festivals', The Star, 27 July 1901, 2 および 'Japanese Art: How Cloisonne is Made', The Star, 2 June 1900, 3）および新聞広告（D. Hay & Son, New Zealand Farmer,（May 1896）, 1）.

24）ウェリントンのアレクサンダー・ターンバル図書館（Alexander Turnbull Library）（以下，ATL）の資料である 'Thompson, Eric Hardistry, 1922–2000: Papers', 'Early Japanese migrants and visitors to New Zealand（a）, Reference No. 2001-008-116, Alexander Turnbull Library（ATL）参照．この他，McNeil K. Encounters, 1860s to 1940s'. In: Pren R. ed. Japan and New Zealand, 150 years. New Zealand Centre for Japanese Studies; New Zealand Department of Internal Affairs: Historical Branch: Wellington; 1999. pp. 24–5 も参照.

25）McNeil 1999, p. 26 およびアレクサンダー・ターンバル図書館の資料である 'The History of Early Relations between Japan and New Zealand: The First Honorary Consul of Japan in New Zealand', in 'Thompson, Eric Hardistry, 1922–2000: Papers', 'Early Japanese migrants and visitors to New Zealand（a）, Reference No. 2001-008-116, ATL 参照.

26）Palmer E. & Rice GW. A Honeymoon in Meiji Japan: The Diary of Jessie Rhodes. The Journal of New Zealand Studies. 1997; 4: 64–94 参照.

27）Auckland Weekly News, 16 January 1902, p. 9 参照.

28）ホッケンに関する以上の記述について，ダニーデンのホッケン図書館（HL）に所蔵されている次の資料を参照．①E. G. Duffus, Secretary for Agriculture, Melbourne, Victoria to Dr. Hocken, Melbourne, 12

December 1904 in Dr Thomas Morland Hocken Papers, Correspondence, MS-0451-020, HL および ② Thomas Sabret, Secretary and Chief Inspector of Department of Agriculture, Tasmania to Dr. Hocken, 12 December 1904, Dr Thomas Morland Hocken Papers, Correspondence, MS-0451-020, HL.

29）キングが所持していたのはChamberlain BH. Things Japanese, being Notes on Various Subjects Connected with Japan for the Use of Travellers and Others. London: John Murrayの第3版で1898年に公刊されたものである．

30）ダニーデンのホッケン図書館（HL）に所蔵されている次の資料を参照．Bella King, Diary 1903–1904, AG 7 5-35, HL.

31）キング夫妻のいずれかの書き込みがなされたもの．‘Map of Truby & Bella King’s tour of Japan’, Reproduced by kind permission of the Plunket Society and Hocken Library, AG-007-005/028.

32）ダニーデンのホッケン図書館（HL）に所蔵されている次の資料を参照．Bella King, Diary 1903–1904, AG 7 5-35, HL; ‘Notes, photographs and mementoes of a trip to Japan by Truby King’, 74C*AG-007-005/028, HL. また，King 1948, pp. 116–149 も参照．

33）明治時代における日本の近代化に関する最近の研究として，Swale A. The Meiji Restoration: Monarchism, Mass Communication and Conservative Revolution. Basingstoke: Palgrave Macmillan; 2009 がある．

34）Gavin M. Shiga Shigetaka, 1863–1927: The Forgotten Enlightener. Richmond, Surrey: Curzon; 2001 および Iggers GG & Wang QE eds. A Global History of Modern Historiography. Harlow: Pearson Education; 2008. pp. 128–156 参照．

35）キングは，自らの考えをChamberlain 1898，p. 79 にメモしている．この写しは，オタゴ大学医学部図書館（Otago Medical School Library）に所蔵されている．

36）Otago Witness, 12 July 1905, p. 81.

37）Evening Post, 31 July 1905, p. 2.

38）King 1948, p. 132 および pp. 141–2 参照．

39）King 1948, p. 138 参照．

40）King 1948, p. 142 参照．

41）20 世紀初頭に日本を訪れたニュージーランド人が撮影したもの．‘Private Garden, Kyoto’, Henry Augustus Jull Family Papers, 1917, page from Scrapbook. Reproduced by kind permission of the Alexander Turnbull Library, MSX-7842-2.

42）King 1948, p. 142 参照．

43）King 1948, p. 136 参照．

44）King 1948, p. 135 参照．19 世紀後半までに，横浜は，日本の固有の植物種を海外へ輸出する際の重要な玄関口となっていたという．Kuitert W. Japonaiserie in London and the Hague: A History of the Japanese Gardens at Shepherd’s Bush（1910）and Clingendael（c. 1915）. Garden History. 2002; 30（2）: 231 および Brown TA. Japanese Plants: The Yokohama Connection. Journal of the California Garden and Landscape History Society. 2008; 11（2）: 8–12 参照．

45）King 1948, p. 150 参照．

46）ダニーデンのホッケン図書館（HL）に所蔵されている次の資料を参照．‘Notes, photographs and mementoes of a trip to Japan by Truby King’, 74C*AG-007-005/028, HL.

47）King 1948, p. 150 参照．

48）Wilkinson A. The Victorian Gardener: The Growth of Gardening and the Floral World. Stroud: Sutton Publishing Ltd.; 2006. Longstaffe-Gowan T. Gardening and the Middle Classes. In: Galinou M. ed. London’s Pride: The Glorious History of the Capital’s Gardens. London: Anaya Publishers Ltd.; 1990. pp. 122–133. Elliott B. Commercial Horticulture in Victorian London. In: Galinou 1990, pp. 168–179 参照．

49）Beattie et al. 2008 参照．なお，ニュージーランドにおける造園の歴史については，Bradbury M. ed. A History of the New Zealand Garden. Harmondsworth: Viking; 1995 が詳しい．

50）Beattie et al. 2008 参照．

51）ダニーデンのオタゴ開拓史博物館所蔵（Otago Settlers Museum）（以下，OSM）の次の資料を参照．‘Garden Notes: Fanciful and Practical’, 1 July 1903, Otago Witness, in ‘Cutting Book: Garden History, AG105’, OSM.

52）Beattie J. Acclimatisation and the “Europeanisation” of New Zealand, 1830s-1920s?. ENNZ: Environment, Nature and New Zealand. 2008; 3（1）: 1–25 参照．

53）Bell D. 2008 参照．

54）Tachibana S., Daniels S & Watkins C. Japanese gardens in Edwardian Britain: landscape and transculturation. Journal of Historical Geography. 2004; 30: 371–84. Shulman N. A Rage for Rock Gardening: The story of Reginald Farrer, Gardener, Writer and Plant Collector. London: Short books; 2003. Kuitert W. 2002 参照．

55）Beattie J. et al. 2008 参照．

56）Otago Witness, 12 July 1905, p. 82 には，キングは「日本の個人庭園の規模の小ささ，およびその中の一つ一つの樹木が小さくまとめられすぎていることが，全体的な庭園としての印象を損なっていると感じていた」という記事が残されている．

57）Chamberlain BH. 1898, pp. 19–21 参照．

58）キングの蔵書のごく一部は，後に彼の娘によって廃棄されたが，大部分はオタゴ大学医学部図書館で保管されている．

59）Evening Post, 20 July 1905, p. 4 参照．

60）20 世紀初頭に日本を訪れたニュージーランド人が撮影したもの．‘Gardens, Kyoto’, Henry Augustus Jull Family Papers, 1917, page from Scrapbook. Reproduced by kind permission of the Alexander Turnbull Library, MSX-7842-2.

61）1920年代はもちろん，1930年代に入っても，キングは，ロンドンのFoyle's社などを通じて，日本に関する書籍を大量に購入している．WA. Foyle to Sir Truby King, London, 24 April 1933, MS-1783/046, HL参照.
62）'Dr Truby King's House, Karitane Peninsula, view near the mouth of the Waikouaiti River', Otago Witness , 18 April 1906, p. 41.
63）Royal New Zealand Plunket Society, Headquarters: Records, 'Gardening, Melrose, etc.', part one, Hocken Library, MS-1783/083参照.
64）King 1948, p. 136参照.
65）この点について，次の書簡を参照．Mary White to Frank Boffa, Tusmore, South Australia, 10 August 1990, in 'Truby King Conservation & Management Plan', JOB # 9047, 9353, BoffaMiskell, Logical House, 190 Willis St., Wellington.
66）Robson D. Bawa: The Sri Lanka Gardens. London: Thames & Hudson Ltd.; 2008. p. 96参照.
67）'View of the garden surrounding the home of Frederic Truby King in Melrose, Wellington. A car is parked in the driveway that winds through the garden and the house can just be seen above the trees at the top of the rise', 1934, in SP. Andrew Ltd: Portrait negatives. Reproduced by kind permission of the Alexander Turnbull Library, No. 1/1-018464-F.
68）King 1948, p. 305参照.
69）King FT. The Feeding of Plants and Animals. Wellington: Whitcombe and Tombs; 1905参照.
70）Otago Witness, 17 January 1906, p. 19参照.
71）Smith PM. King, Sir（Frederic）Truby（1858–1938）. Oxford Dictionary of National Biography. Oxford: Oxford University Press; 2004参照.（http://www.oxforddnb.com/view/article/34320）（2008年12月19日アクセス）
72）Belgrave MP. Medical Men and "Lady Doctors": The Making of a New Zealand Profession, 1867–1941. Ph.D. thesis: Victoria University of Wellington; 1985参照.
73）King 1948, p. 85参照.
74）Brasch C. Indirections: A Memoir, 1909–1947. Wellington: Oxford University Press; 1980. p. 119参照.
75）J. Macmillan Brownの論評である'The East and the West'参照．この論評は，The Press, 24 May 1913に掲載されている．
76）Smith PM. Infant Welfare Services and Infant Mortality: A Historian's View. Australian Economic Review. 1991; 24（1）: 22–34参照.
77）Bryder L. 2003, p. 1. Tennant M. Children's Health, The Nation's Wealth: A History of Children's Health Camps. Wellington: Bridget Williams Books and Historical Branch, Department of Internal Affairs; 1994. p. 23参照.
78）Smith PM. 1991参照.
79）King FT. Feeding and Care of Baby. London: Macmillan & Co.; 1925. p. 153参照.
80）Low M. 2005参照.
81）Frühstück S. 2003, p. 6参照.
82）Frühstück S. 2003, pp. 1–82参照.
83）King 1948, p. 133参照.
84）King 1948, p. 128参照.
85）King 1948, p. 138および，ダニーデンのホッケン図書館（HL）に所蔵されている次の資料を参照．'Notes, photographs and mementoes of a trip to Japan by Truby King', 74C*AG-007-005/028, HL.
86）京都府立大学のホームページ（http://cocktail.kpu.ac.jp/English/history.html）を参照（2009年1月9日アクセス）.
87）ダニーデンのホッケン図書館（HL）に所蔵されている次の資料を参照．5 November, Kyoto, Bella King, notebook, Ag-007-005/033, HL.
88）Willcock H. Traditional Learning, Western Thought, and the Sapporo Agricultural College: A Case Study of Acculturation in Early Meiji Japan. Modern Asian Studies. 2000; 34（4）: 977–1017参照.
89）Caldwell C. Truby King and Seacliff, 1889–1907. In: Hunter R. ed. Unfortunate Folk. London: John Churchill; 1968. pp. 42–43およびMacGregor D. Report on Lunatic Asylums of the Colony for 1897. Appendices to the Journal of the House of Representatives［AJHR］. 1898; 3（H-7）: 7参照.
90）Evening Post, 7 August 1905, p. 4参照.
91）Otago Witness, 28 June 1905, p. 33参照.
92）West Coast Times, 28 July 1905, p. 2参照.
93）Evening Post, 7 August 1905, p. 4参照.
94）West Coast Times, 28 July 1905, p. 2参照.
95）Otago Witness, 28 June 1905, p. 18参照.
96）Otago Witness, 22 May 1907, p. 12参照.
97）Frühstück 2003, p. 24参照.
98）Saito O. Infant Mortality in Pre-Transition Japan: Levels and Trends. In: Bideau A., Desjardins B. & Birgnoli HP. eds. Infant and Child Mortality in the Past. Oxford: Clarendon Press; 1997. pp. 135–153参照.
99）Frühstück 2003, p. 51およびUno KS. Passages to Modernity: Motherhood, Childhood, and Social Reform in early twentieth century Japan. Honolulu: University of Hawai'i Press; 1999参照.
100）Otago Witness, 20 March 1907, p. 66参照.
101）Otago Witness, 20 March 1907, p. 66参照.
102）Taranaki Herald, 11 March 1907, p. 4参照.
103）Bowler P. The Norton History of the Environmental Sciences. New York: W.W. Norton & Company; 1993およびBeattie J. Colonial Geographies of Settlement: Vegetation, Towns, Disease and Well-Being in Aotearoa/New Zealand, 1830s–1930s. Environment and History. 2008; 14（4）:

583–610 参照.

104）Evening Post, 31 July 1905, p. 2 参照.

105）Evening Post, 7 August 1905, p. 4 参照.

106）Fairburn M. The Ideal Society and its Enemies: The Foundation of Modern New Zealand Society 1850–1900. Auckland: Auckland University Press; 1990 および Fairburn M. The Rural Myth and the New Urban Frontier: an approach to New Zealand social history, 1870–1940. New Zealand Journal of History. 1975; 9（1）: 3–21 参照.

107）Olssen E. Building the New World: work, politics and society in Caversham, 1880s–1920s. Auckland: Auckland University Press; 1995 および Olssen E. Towards a New Society. In: Rice G. ed. Oxford History of New Zealand. Auckland: Auckland University Press; 1992. pp. 254–284 参照.

108）その一方で，当時の日本人の思想家の中には，志賀重昂のように，ニュージーランドこそが，日本が見習うべき社会モデルを提供していると考える者もあった．McNeil K. New Zealand Through a Japanese Glass, 1869–1944. Japan Forum. 2006; 18（1）: 23–43 および Gavin M. 2001 参照.

109）Otago Witness, 26 July 1905, p. 8 参照.

110）Evening Post, 20 July 1905, p. 4 参照.

111）King 1948, p. 309 参照.

112）Belich J. Paradise Reforged: A History of New Zealanders from the 1880s to the Year 2000. Harmondsworth: Allen Lane The Penguin Press; 2001 参照.

113）Campbell D. What lies beneath those strange rich surfaces?: Chinoiserie in Thorndon. In: Ferrall C, Millar P. & Smith K. eds. East by South: China in the Australasian Imagination. Wellington: Victoria University Press; 2005. pp. 173–189. Ballantyne T. & Moloughney B. Asia in Murihuku: towards a transnational history of colonial culture. In: Ballantyne T. & Moloughney B. eds. Disputed Histories: Imagining New Zealand's Pasts. Dunedin: University of Otago Press; 2006. pp. 65–92. Johnson H. & Moloughney B. eds. Asia in the Making of New Zealand . Auckland: Auckland University Press; 2007 参照.

Health and Garden Connections between Japan and New Zealand: The Impact of Bella and Frederic Truby King's Visit to Japan in 1904

James BEATTIE[1)], Hiroki OIKAWA[2)]

[1)] History Programme, University of Waikato,
[2)] Graduate School of Environment and Information Sciences, Yokohama National University

Through the case-study of the visit of a prominent New Zealand medical reformer and his wife to Japan in 1904, this article examines new aspects of the health and environmental connections between Japan and New Zealand in the early twentieth century. At one level, the article analyses the broader context of interest in Japanese plants in New Zealand and the model of Japanese health reforms constituted by these connections. At another, it argues that subjects previously considered separate — such as modern health reform, scientific agriculture and gardening, and Japanese and New Zealand intellectual influences — need to be considered together as contemporaries understood them. Doing so, it suggests, enables the more accurate consideration of the intellectual and scientific worlds of the early twentieth century and hints at the global dimensions of aspects of thought and state and societal reform associated with modernity.

Key words: New Zealand, modern health reform, Frederic Truby King